

十勝教育研究

巻頭言

十勝教育研究所運営委員会
委員長
菅野 勇次

教育現場への期待

JICA北海道(帯広)
代表
木全洋一郎



わたしの授業実践

音更町立音更小学校
教諭
森 圭介

わたしの学級経営

芽室町立芽室中学校
教諭
島田 裕行

共に学び共に育つ

鹿追町立鹿追小学校
教諭
只野 解子

健やかな心と体

浦幌町立浦幌中学校
養護教諭
多田 怜代

研究所めぐり

上士幌町教育研究所
所長
山田 圭介

日々徒然

音更町立西中音更小学校
教諭
井村 充

日々徒然

広尾町立広尾中学校
教諭
門 諒



不登校に

どう向き合うか

特集

巻頭言

十勝教育研究所運営委員会
委員長

菅野 勇次

(幕別町教育委員会 教育長)



「授業改善」と

「授業改革」

GIGAスクール構想による1人1台端末の環境整備は、ICT活用による授業改善を教育現場に強く促しました。各学校では、とにかく慣れることが大事と、タブレットなどの1人1台端末を使った授業が盛んに取り組まれました。授業風景も随分様変わりしたと感じたものです。

ところが、導入から3年目となり、この風景にばらつきが見られるようになりしました。一人一人が自分の考えを端末に打ち込んで、Jamboardなどのアプリでリアルタイムに交流している授業風景を見ることもあります。一方、タブレットを使うのは先生だけで、子どもたちは大型モニターに映し出される画像や動画を見て学習している授業、

あるいは子どもは1人ずつ端末を開いているものの、先生からの配信画像を手元で見ているだけの授業などを見ることも少なくありません。

これでは、拡大写真を黒板に貼ったりOHPで資料を映し出したりする何十年も前の授業風景とあまり変わりません。さらには、端末の扱い方は分かったと言いつつ、ほとんど端末を使わないで昔ながらの一斉授業を行っている学校さえ見られます。

そもそも、1人1台端末は、令和の日本型学校教育の姿である「個別最適な学び」「協働的な学び」を実現するためのツールとして導入されたわけですから、1人1台端末を使用しないことや、1人1台端末を使っても相変わら

ず教師主導の一斉授業というのは、最初から方向が違っていると云えます。まず、教師主導の授業から子どもたちが主体的に学ぶ授業への転換が不可欠であり、それを可能にする強力なツールとしてタブレットなどの1人1台端末を日常的に使うことが今強く求められているのです。

学習者主体の授業改善は、これまでも幾度となく提唱されてきましたが、大きく広がることはありませんでした。「時間が掛かり過ぎて教科書が終わらない」「受験がある以上無理」などが大きな理由として挙げられました。実際、子どもたちが自ら学ぶ授業を成立させるには、地道に子どもたちのスキルアップを図る毎日の取組と、教師による膨大な準備が必要でした。とても負担の大きい改善だったと思います。しかし、今はそれを1人1台端末が担ってくれる時代となりました。今初めて、膨大な労力を掛けなくても学習者主体の授業が成り立つ基盤ができてきたと言えるのです。

一方、授業にはあまり使っていないが、先生方の研修や会議に、大いに活用していると胸を張る学校もあります。確かにすばらしい活用なのですが、1人1台端末はあくまで学習用端末です

ので、授業で使ってこそ、その真価が発揮されます。そのことに早く気付いてほしいと思っています。

今、全ての学校と先生方には、本気になって教師主導の一斉授業から子ども主体の授業に転換する覚悟が求められていますと感じます。それは、単なる改善ではなく、授業に対する考え方を根本から大きく転換する授業改革と言えます。

さらには、子どもたちが端末を自由に使いこなせるようにするために、端末に触れる機会をとにかく多くすることも必要です。それには、毎日の授業でとにかく使っていくしかありません。「ICTは苦手」「自分はアナログ人間だから」などと言わずに、毎日の授業でとにかく子どもたちと使ってみましょう。子どもたちと一緒に学んでいく気持ちで毎日の授業に取り入れていきましょう。それが授業改革に取り組むことになります。

十勝教育研究所では、この分野でも先進的で確かな実践研究が進められています。各学校と先生方が十勝教育研究所とともに、これらの授業改革をしっかり進めていくことを大いに期待しています。

特集 不登校に どう向き合うか

CONTENTS

18	◆連載 共に学び共に育つ 継続はきつと力なり 鹿追町立鹿追小学校 教諭 只野 解子
16	◆連載 わたしの学級経営 日常を大切にすることができ 学級を目指して 芽室町立芽室中学校 教諭 島田 裕行
14	◆連載 わたしの授業実践 「子どもの言葉」を大切に する授業 音更町立音更小学校 教諭 森 圭介
4	◆特集 不登校にどう向き 合うか
2	◆教育現場への期待 JICA北海道(帯広) 代表 木全洋一郎
1	◆目次
	◆巻頭言 「授業改善」と「授業改革」 十勝教育研究所運営委員会 委員長 菅野 勇次
19	◆連載 健やかな心と体 全校生徒との健康相談 浦幌町立浦幌中学校 養護教諭 多田 怜代
20	◆研究所めぐり 「自分で考え自分で決めて自分で行動 する児童(自己指導力のある生徒)」の 育成に向けて 上士幌町教育研究所 所長 山田 圭介
22	◆教育情報 共同研究・協力員研究 研修会等報告 研究発表大会案内・数字で見る十勝の教育
30	◆編集後記 ◆日々徒然 転校生活も悪くない 音更町立西中音更小学校 教諭 井村 充 親になる 広尾町立広尾中学校 教諭 門 諒
	◆学校めぐり 幕別町立途別小学校 校長 佐竹 宏子



JICA北海道(帯広)

代表 きまた 木全洋一郎さん

眼下に雄大な十勝平野と帯広市を見下ろす小高い丘の一角は、帯広の森構想に基づいたグリーンベルトになっている。雪解けの春から夏にかけては、白樺や柏の林、草原の緑に包まれる。エゾリスやキタキツネが駆け、どこからともなくアカゲラやシジュウカラなどの小鳥たちの鳴き声が聴こえてくる。この自然豊かな場所に、JICA北海道(帯広)がある。

青年海外協力隊のような開発途上国への支援や技術協力など、国際協力に関わる事業はご存知の方も多いだろう。そのほかにも、国際理解教育や研修員との交流、施設見学など、学校教育との関わりも深い。帯広市が全小・中学校を対象に実施している「おびひろ市民学」では、SDGsをテーマに十勝と世界のつながりについて学ぶ機会を提供するなど、教育に関わる様々なプログラムも実施されている。

今回は、JICA北海道(帯広)の

代表である木全洋一郎さんに取材を行った。開発途上国への支援活動やタンザニアへの赴任など、多彩な経験をお持ちの木全さんに、仕事をする上で大切にされていることや、教育現場に期待することについて話を伺った。

まず、仕事をする上で大切にされていることについて伺った。

「JICAとして、『国際理解』という視点は得意とするところなのですが、それ自体が目的化するところがありません。外国の話は、どこか遠くに感じてしまうところがあって。けれども、実は突き詰めるとそれはあくまで手段であって、いろいろな立場の人や境遇の人がいることや、どの人が上か下かかではない、グローバルな視点で物事を考えることができるようになるべきだなと考えています。ですので、先生方・学校を通して、より広く地域の子どもたちに世界中の地域や人々がもつ

多様性というものが伝わっていかばよいと思っけています。地域のすばらしい取組や、逆に地域が抱えている課題に対して、我々のもっている経験やネットワークをマッチングさせていくところがやりがいでもあり、楽しみでもあります。一番大事にしているのは、現場です。開発途上国でも十勝でも同じで、目を向けるのは現場の人々の視点というミクロなところなのです」と、熱く語られた。

次に、子どもたちへの思いを伺った。「JICAなので、世界のいろいろな国々へ目を向けてほしいというのはあります。ただ、大事にしてほしいことは、自分たちのふるさとに目を向けて、すてきなところ、よさなどの『宝』を見付けることです。それを見付ければ見付けるほど、ふるさとをもっとすばらしいと思えます。東京などの都会に憧れるかもしれませんが、都会にはないすばらしいものが自分のふるさとにはあるという思いが、自分たちのアイ

デンティティーになります。これを子どもどものときに見付けてほしいです。時代が変わっても守らなければならぬものなどを、自分たちで見いだして、将来をつくってほしいです。そのため、JICAが得意な国際理解の視点を使ってほしいです」というメッセージをいただいた。

最後に、先生方に向けて、「国際理解というと、遠く離れた地域の話と感じがちだと感じています。海外のフィルターを通して見ることで、地域が違って見えてくる、そしてそれを知ることが大事だと思います。授業をつくるにしても、JICAのもっている知見や、人材を活用していただければうれいのです。図書資料室（おびぶつく）も充実していますし、学校訪問やオンラインでの交流に関わる相談等も随時受け付けています。先生方と一緒につくっていただけたらいいと思います。気軽にご連絡ください」という思いを語ってくださいました。



上：訪問事業でのSDGs学習の様子



右：JICA研修員と高校生の料理交流の様子

下：研修員による地域学校での交流プログラムの様子

JICA北海道（帯広）

問合せ先

◆ 電話 0155-35-1210

◆ FAX 0155-35-1250

◆ HP <https://www.jica.go.jp/domestic/obihiro/index.html>

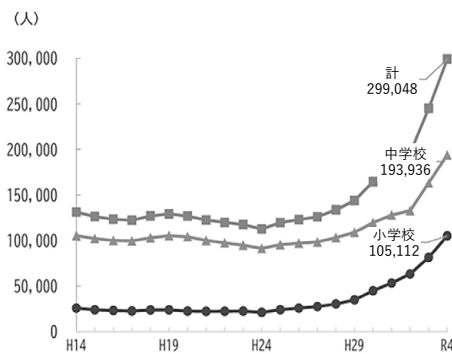
国際理解は、目的ではなく手段である。
グローバルに考え、ローカルに行動していききたい。

特集

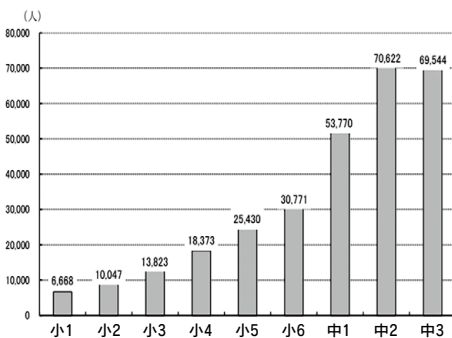
不登校にどう向き合うか

不登校の現状・国の近年の施策
 不登校の多様化・対応・体制づくり
 不登校に携わる様々な立場から
 おわりに・様々な子どもの居場所

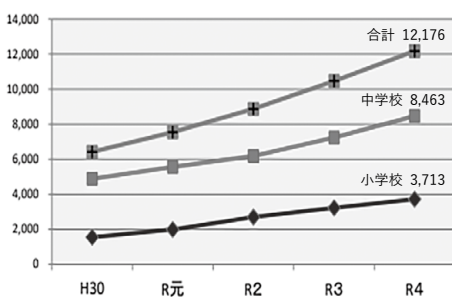
P. 4 ~ 5
 P. 6 ~ 10
 P. 11 ~ 12
 P. 13



不登校児童生徒数の推移【グラフ1】



R4 学年別不登校児童生徒数【グラフ2】



道内の不登校児童生徒数【グラフ3】

グラフ1・2: 文部科学省HP、グラフ3: 北海道教育委員会HPより

令和5年10月4日に文部科学省から発表された「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」によると、小・中学校における不登校児童生徒数は10年連続で増加し、過去最多となっています(グラフ1参照)。その割合は、小学校が1・7%で約59人に

前年度から16%の増加となっており(グラフ3参照)、主な要因は全国と同じ傾向を示しています。十勝管内では780人で、前年度から136人の増加となっています。

(1) 全国

◆ 不登校の現状

不登校の定義
 何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的理由による者を除いたもの(文部科学省)

(2) 全道・十勝

全道の不登校児童生徒数は1万2176人で、前年度から16%の増加となっており(グラフ3参照)、主な要因は全国と同じ傾向を示しています。また、不登校児童生徒数のうち、全体の38%にあたる約11万4千人が、学校内外で相談・指導等を受けていない現状も大きな問題となっています。

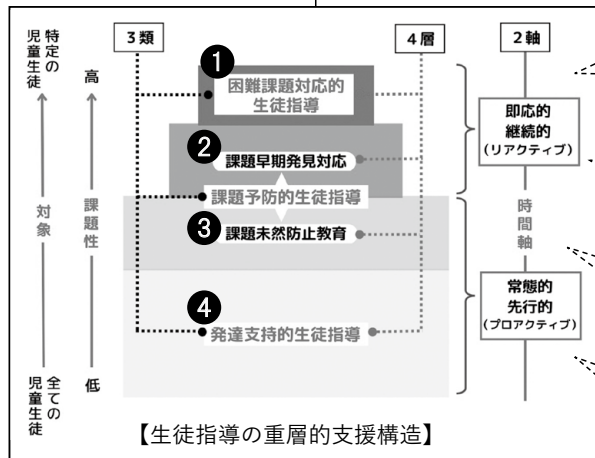
1人、中学校が6・0%で約17人に1人となっています。主な要因は「無気力・不安」が51・8%と最も多く、「生活のリズムの乱れ、あそび、非行」「いじめを除く友人関係をめぐる問題」「親子の関わり方」が続きます。文部科学省は、コロナ禍による生活環境・交友関係・学校生活等の様々な変化も影響していると分析しています。



調査結果概要(文部科学省)
 ※不登校関連部分: P20-30

法律・通知	内容・キーワード
<p>■教育機会確保法 【2017年施行】 正式名称：「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」</p>	<p>① 休養の必要性 ② 関係機関の連携体制・学校以外の学びの場の大切さ ③ 「学校復帰」ではなく「社会的自立」を目指す ④ 公民連携 ⑤ 児童生徒や保護者への必要な情報提供 ⑥ 魅力あるよりよい学校づくり</p>
<p>■不登校児童生徒への支援の在り方について 【2019年】</p>	<p>※民間施設での相談・指導、自宅でのICT等を活用した学習 →要件を満たせば指導要録上出席扱いとすることが可能 ※「児童生徒理解・教育支援シート」等の作成が望ましい</p>

<p>■生徒指導提要 【2022年改訂】 第10章 不登校</p>	<p>① 学校に登校するという結果のみを目標とするのではない ② 将来、児童生徒が精神的にも経済的にも自立し、豊かな人生を送れるような社会的自立を目指せるように支援を行う ③ 自立の姿は多様であるため、学校復帰や転学等の形だけを整えるのではなく、個に応じた社会的自立に向けて、目標の幅を広げた支援を行うことが必要</p>
--	--



【左図の4層の不登校対応例】

- ① 家庭訪問/SCやSSW等によるカウンセリング/別室登校/校外関係機関と連携した継続的支援
- ② 休み始めの段階でのアセスメント/教職員、SC、SSW、保護者の連携・協働による支援
- ③ 児童生徒のSOSを出す力の獲得、教職員が児童生徒の変化に気づきSOSを受けとめる力の向上/教育相談体制の充実
- ④ 児童生徒にとって安全・安心な居場所となるための魅力ある学校づくりと分かりやすい授業の工夫

■COCOLOプラン
【2023年】
正式名称：「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」

※不登校の増加を受け、10/17に文部科学省はCOCOLOプランの前倒しを含む緊急対策を発表。→

- 1 不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思った時に学べる環境を整えます。**
— P5

 - ✓ 一人一人のニーズに応じた多様な学びの場が確保されている
※ 不登校特例校、校内教育支援センター(スペシャルサポートルーム等)、教育支援センター等、こども家庭庁と連携した多様な学びの場、居場所を確保
 - ✓ 学校に来られなくてもオンライン等で授業や支援につながる事ができる
 - ✓ 学校に戻りたいと思った時にクラスを変えたり、転校したりするなど本人や保護者の希望に沿った丁寧な対応がされている
- 2 心の小さなSOSを見逃さず、「チーム学校」で支援します。**
— P7

 - ✓ 1人1台端末で小さな声が見えられ、心の不安や生活リズムの乱れに教師が確実に気づくことができる
 - ✓ 小さなSOSに「チーム学校」で素早く支援することにより、早期に最適な支援につなげられている
 - ✓ 教育と福祉等が連携し、子供や保護者が必要な時に支援が行われる。
※ こども家庭庁と連携し自治体の教育部署と福祉部署等の連携・協働を強化
- 3 学校の風土の「見える化」を通して、学校を「みんなが安心して学べる」場所にします。**
— P9

 - ✓ それぞれの良さや持ち味を生かした主体的な学びがあり、みんなが活躍できる機会や出番がある
 - ✓ トラブルが起きても学校はしっかり対応してくれる安心感がある
 - ✓ 公平で納得できる決まりやルールがみんなに守られている
 - ✓ 障害や国籍言語等の違いに関わらず、色々な個性や意見を認め合う雰囲気がある

◆現場の困り感

不登校の子どもの存在と、その対応への悩みは、常に学級担任の心の一角を占めているのではないのでしょうか。不登校に向き合う際は、次のような思いを抱くことが考えられます。



◆原因や状態の多様化

不登校の原因としては、次のようなものが挙げられます。

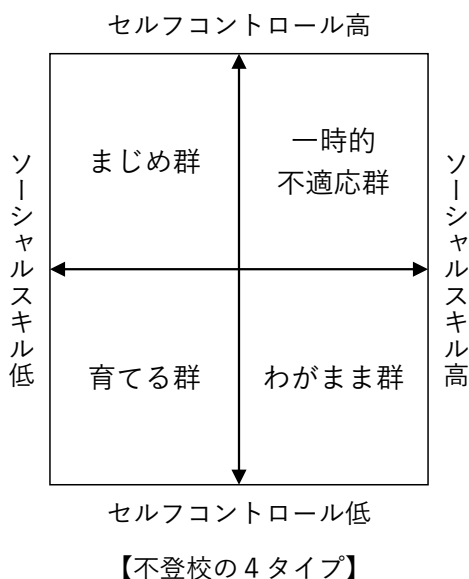
- ・心身の不調
- ・人間関係（先生・友達・先輩など）
- ・学習関係（授業・成績など）
- ・生活関係（生活リズム・家庭事情など）
- ・きっかけが何か自分でもよくわからない

不登校の初期段階で原因を把握し、そのストレスに対して何らかの手を打つことができれば、それに越したことはありません。しかし、原因は必ずしも1つではなく、複数が絡み合っているケースも多いのです。また、教職員が考える不登校の原因と、子どもが考える原因には、ずれが生じていることがあります。さらに、本人にもわからない、言語化できないということも少なくありません。**原因を追及することに力点を置くのではなく、「子どもの悩みに周囲が気付かず、本人が1人で悩んできたのだな」と考え、まずは子どもの話にじっくりと耳を傾け、気持ちに寄り添うことが求められます。**そのような関わりを通して、子どもに**安心感を与え、信頼関係を築いていく**ことが第一歩になります。

かつての「学校に行くのは当たり前」という社会規範や、保護者の意識には変化が生じ、子ども

たちは多様な理由から学校を休むようになりまし
た。この「多様な進路の一環としての不登校」と、
「家庭事情や障害などが絡む不登校」の、二極化
が起きているという指摘もあります。前者には多
様性の確保が、後者には福祉的介入が必要で
す。その対応を誤らないように、**不登校の背景にある
要因を多面的かつ的確に把握し、早期に適切な支
援につなげるアセスメントの視点が求められてい
ます。**

不登校が本格化した段階では、左図のように大
きく4つのタイプに分けて考えることもできま
す。向き合う子どものタイプを大まかに把握するこ
とで、その後の対応を練る助けになると考えられま
す。



小林正幸「事例に学ぶ 不登校の子への援助の実践」より

◆本人・保護者への対応

まず、本人・保護者の現状や特性を理解し、適切な接し方を把握する必要があります。対応する教師の思いが強く先行してしまう場合がありますが、本人・保護者と意識や方向性を共有して、一緒に取り組んでいくことが大切です。

不登校支援の目標は、将来、子どもが精神的にも経済的にも自立し、豊かな人生を送れるような社会的自立を果たすことです。そのため、不登校時の子どもに、将来の適応に役立つ力である**コーピングスキル（ストレスに対処する力）**を養う意識をもつことが有効だという考えがあります。小林正幸氏は、著書の中で次の2つのコーピングスキルをあげています。

① ソーシャルスキル

人間関係を円滑に結ぶ力

② セルフコントロール

課題に取り組んでいく力

このうち、不登校の子どものセルフコントロールについて考えたとき、対応の仕方は次のように変わってくると小林氏は述べています。

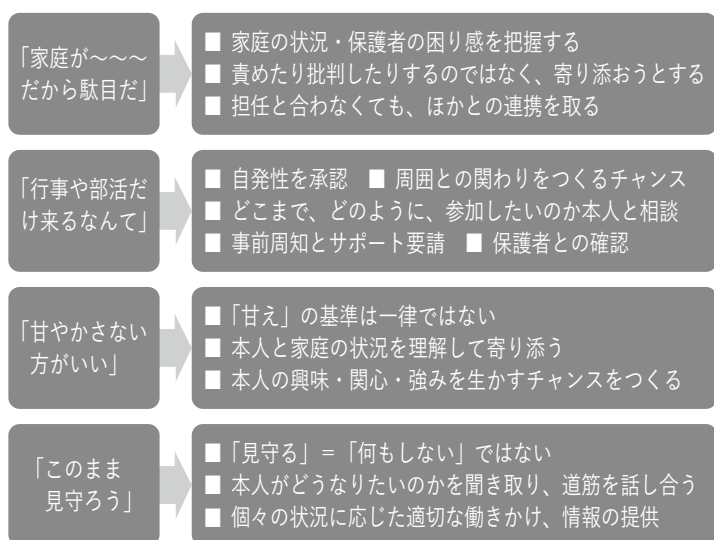
↓セルフコントロール過多（頑張り過ぎ・我慢し過ぎてきた子ども）に対して

- ・ 一定程度怠惰になるのは当然と考える。
- ・ 視野を広げ、自分が本当に頑張り、耐えるに足るものを選び、緩急を付けられるようにすることが必要であることを伝える。

↓セルフコントロール不足（頑張り切れない・我慢が続かない子ども）に対して

- ・ 「頑張り」は成功体験から、「我慢」は承認と賞賛から培われることを周囲が理解し、その機会を意識的につくる。
- ・ 本人の「頑張り」と「我慢」に周囲が関わり、見届け、その成長を言語化して認めたり褒めたりして、一緒に喜ぶ。

さらに、学校側では左図のような考え方の転換や、対応策を意識する必要があります。そして、下に示したような項目を心掛けることが、本人・保護者とよい関係を築くことにつながります。



【考え方の転換や対応策の例】

本人に対して

- ・ 否定しない、操作しようとししない
- ・ ありのままを受け入れ、寄り添う
- ・ 心理的、空間的な安全基地を提供する
- ・ 選択肢を用意し、自己決定をさせる
- ・ 自尊心や自己肯定感を大切に
- ・ スモールステップで、できたことを認め、一緒に喜ぶ

保護者に対して

- ・ 不安、焦り、自責の念等を理解する
- ・ ねぎらいの姿勢で対応し、話を聞いて、よりよいパートナーシップをつくる
- ・ 負担にならない連絡の配慮（手段・時間帯・頻度）
- ・ 家庭訪問・来校面談で顔を見て
- ・ 子どもを信じて、一緒に応援する
- ・ 迅速、丁寧、親切、誠意、継続

教師が心掛けたいこと

- ・ 心にゆとりを、柔らかい表情で
- ・ 話を聞き、寄り添う
- ・ 答えを急がせない
- ・ まずは学校の話ではなく、趣味の話や世間話から
- ・ 自分の思いや規範意識を押し付けない
- ・ 登校のみを目標としない
- ・ 短期解決しようとせず、今できることを一緒に探る
- ・ 一人で解決しようとししない、周囲の援助を拒まない
- ・ 自分の能力や資質を否定しない

【対応の心得】 新潟県教育委員会「不登校対策リーフレット」等を参考に作成

◆校内体制づくり・関係機関との連携

不登校は、学級担任が一人で抱え込むのではなく、管理職のリーダーシップと教職員の同僚性の下、「チーム学校」として向き合っていくことが求められています。担任に掛かる物理的・精神的な負担の大きさを周囲が理解すること、担任自身が周囲に相談や協力を求め、受け入れることが大切です。不登校の子どもに関わる人、担任を支える人は、複数いることが望ましく、そのためには普段からの情報共有が欠かせません。関わることのできる人が、関わることでできる範囲で、つながりをつくる機会を増やし、役割を分けもつことが重要です。

一方、多様化する不登校に対して、学校だけの力では十分な支援が難しくなっている状況も見られます。福祉的介入を要する場合は、速やかに管理職を通して教育委員会に報告し、役場福祉課や児童相談所に対応してもらう必要があります。これとは別の支援として、スクールカウンセラー（SC）やスクールソーシャルワーカー（SSW）（SC）やスクールソーシャルワーカー（SSW）、教育委員会が設置する教育支援センター、民間団体やNPO法人が運営するフリースクール等、様々な関係者や機関に「つなぐ」ことも必要です。学校と外部機関が責任を分けもち、相互に協力・補完し合うことが大切になります。不登校の子どもの保護者にとっても、多様な居場所や、学習・心身のサポートがあることの意義は大きいと考えられます。

チェックシート「学校づくり」5つの視点

（佐賀県教育委員会資料を一部編集）

校内体制の充実強化

- 教職員相互の報告・連絡・相談はできていますか。
- 教職員間の役割分担が共通理解できていますか。

教育相談の充実強化

- 子どもたちとよりよい人間関係ができていますか。
- SC、SSW等と積極的に連携していますか。
- 保健室や相談室等、学校内の居場所を整備していますか。

教職員の研修強化

- 「分かる授業」「楽しい授業」のための研修はできていますか。
- 不登校に関する研修はできていますか。
- 全教職員に早期発見・早期対応できる力は身に付いていますか。

小・中学校の連携強化

- 基本的な情報の提供・収集ができていますか。
- 行事等でのふれあいなど、子どもたちの交流はできていますか。
- 教職員による小・中学校間の連携はできていますか。

関係機関や家庭・地域との連携強化

- 関係機関や家庭・地域の役割を理解し、積極的に連絡をとっていますか。
- 情報提供だけでなく、対応方法についての助言も求めていますか。

教職員が不登校への理解を深める

- ・不登校は、取り巻く環境によってはどの子どもにも起こり得ることであり、「問題行動」と判断してはならない。
- ・「不登校の子どもが悪い」という偏見を払拭する。
- ・不登校の子どもの視点に立ち、不安や焦り、苦しさ、引け目、恥ずかしさ、罪悪感、自己否定など様々な気持ちを想像する。
- ・子どもを否定せずに寄り添い、共感的理解と受容の姿勢をもつことが、自己肯定感を高める。

特別支援教育
コーディネーター



養護教諭



少年団・
部活動顧問



様々な立場
からの
見守りと連携

SC・SSW



フリースクール等
関係機関担当者



9月

10月

11月

12月

1月

2月

3月

学級全員との教育相談期間の設定

小・中連携を踏まえた学校行事、合同授業などによる子どもたちや先生との交流

学習支援を忘れずに!



小・中連携②
小6についての情報交換

健康チェック・
基本的な生活習慣チェック(養護教諭を中心に)



冬休み明けの
登校支援

豊かな人間関係づくりを
目指した授業の展開Ⅱ

新入学前の学校
見学・説明会

校内研修

よかった事例などに基づく
会議を行い、情報を共有する。

入学予定の子ども・
保護者への相談

小・中連携③
引継ぎ

配慮事項の引継ぎ・
受入準備・クラス編成の情報交換

◆学級体制づくり

学級の子どもたちは、不登校の子どもに対して疑問や不公平感を抱いたり、心配したり、逆に無関心であったり、様々な反応を示すことが考えられます。

登校や学級に入ることが難しいと感じている本人の状況・理由や、登校することができたときほどのような関わりを望んでいるかを、担任から子どもたちに伝えることは大切なステップだと考えられます。その際は、事前に本人・保護者と「何を、どこまで、どのように学級に伝えるか」について確認しておく必要があります。

また、学級の子どもたちには、休んでいることは決して楽なことではなく、本人は不安や焦り、引け目、自己否定といった感情と隣り合わせであることを想像させ、無用な不公平感を生まない配慮も必要です。

折に触れて、家庭訪問や別室登校の際の本人の様子・エピソードを学級の子どもたちに伝えることは、その子が学級の一員であるという意識や、ゆるやかなつながりを保つきっかけになると思われます。担任が不登校の子どもを否定せずに受け入れ、温かく見守り、力になろうとしている姿勢は、ほかの子どもたちにも伝わります。



また、次の3つをうまく生かすことは、本人と学級の子どもたちの関わりをつくるチャンスになると考えられます。

- ① 学校行事、学級レク、実習等
- ② 本人の興味・関心、強み
- ③ 本人と共通点や関わりがある子ども



①は、「楽しさ」や「他者との関わり」を実感する機会になります。本人に前もって知らせ、意思確認をします。中断したり、その場を離れたりしてよいこと、必要に応じてSOSを出すこと等を本人と子どもたちに伝えます。

②は、例えば「イラストが得意」「○○のゲームに詳しい」等を学級の子どもたちに知ってもらうことで、本人との接点や会話の糸口になります。本人の強みを生かした作品や実演を、披露する機会をつくることも効果的でしょう。

③は、本人に自発的に関わろうとする子どもがいる場合は、その力を借りて子ども同士の間をつなぐ見守ればよいでしょう。一方で、本人の方から関わりを望む相手には、教員を通して働きかけが生じる場合があります。その子どもへの意思や交友関係を大切に、無理が及ばない範囲で関わってもらおう配慮が必要です。

このような積み重ねが、不登校の子どもにとって、安心できる相手や空間を少しずつ広げていくきっかけになると考えられます。



参考

- ・文部科学省ホームページ
- ・佐賀県教育委員会「すべての子どもたちに魅力ある学校生活を」※①
- ・新潟県教育委員会「不登校対策リーフレット」
- ・神奈川県教育委員会「登校支援のポイントと有効な手立て」
「誰もが和らぐ学校を目指して」※②



※①

※②

- ・小林正幸「事例に学ぶ：不登校の子への援助の実践」
- ・伊藤美奈子「不登校—その心もよう」と支援の実践」
- ・増田健太郎「学校の先生・SCにも知ってほしい
不登校の子どもに何が必要か」
- ・貴戸理恵「私たちは、『不登校』をどう考えればよいのか」
- ・音更町教育委員会主催「登校に悩みをかかえる子どもを支える学習会」

	4月	5月	6月	7月	8月
チーム支援	前担任との情報交換	校内研修	連休明けの登校支援	学級の子ども全員との教育相談	校内研修 夏休み明けの登校支援
	配慮すべき子どもの把握	新たな人間関係づくり	3日連続の欠席にアクション! 早期対応で長期化防止!	豊かな人間関係づくりを 目指した授業の展開I	3日続きの欠席には 働きかけを
	健康チェック・基本的な生活習慣チェック(養護教諭を中心に) 保健室登校の子どもへの対応(担任・SCと連携)			小・中連携① 授業参観・情報交換	学習支援を忘れずに!

【年間を見通した登校支援のポイント】 神奈川県教育委員会「登校支援のポイントと有効な手立て」を参考に作成

◆ 個別の対応事例

事例① 対応時期…小3の3学期～卒業

【本人の状態】登校しようとするのと激しい腹痛に襲われ、トイレに数十分籠もる。

【家庭での様子】過度に人目を気にして外出しなからない。生活は規則正しく、母親に見てもらいながら学習を進める。

【具体的な対応策】

■友人が学校に誘う

↓登校につながらなかつたので、担任から誘わないように伝えた。

■週末の家庭訪問と、1時間程度の学習指導

■保健室登校や別室登校

↓登校意欲はあるが、腹痛になり実現せず。

■学級の子どもたちからの手紙や折り紙

↓本人からお返しがあった。

■SC・担任・支援担任で定期的に面談

■長期休業中の登校

↓絵を描いたり、裁縫をしたりした。

事例② 対応時期…小5の1学期～卒業

【本人の状態】周りの視線が気になる。男性教師への苦手意識がある。学習の遅れへの不安感。

【家庭での様子】タブレット端末を長時間使用。

【保護者】母子家庭。連絡が繋がらず、家庭

訪問をしても不在が多く、協力が得づらい。

【具体的な対応策】

■登校するための手立てをクラスで考える

■学級の子どもたちからの手紙

■タブレット端末で子ども同士の交流

■タブレット端末で補習や課題提出

■保護者への連絡手段をメールに

↓少しずつ保護者の協力を得られるように。

■「修学旅行と卒業式に出る」と目標を立てる

↓どちらの行事にも参加することができた。



事例③ 対応時期…中1の2学期～卒業

【本人の状態】周りの視線が気になる・悪口を言われている気がする。

【家庭での様子】昼夜逆転・スマホ長時間使用。

【保護者】協力的・行動力あり。

【具体的な対応策】

■別室登校

↓登校するタイミングは、カレンダーや時間割

を見ながら本人と相談して決めていた。

■友人との関わりを継続

↓昼休みなどに別室に来て談笑。本人が教室に入るときは迎えに来てもらった。

■部活動・調理実習・学校行事への参加

■SC・担任・支援担任で定期的に面談

■本人が得意とするイラスト画を生かす

↓修学旅行のしおりの表紙、生徒会シンボルマ

ーク、作品展示などで、イラストを見た人か

ら声を掛けられ自己肯定感につながった。入試面接でもアピールポイントになった。



事例④ 対応時期…中2の3学期～卒業

【本人の状態】勉強が辛い。友人関係は良好。騒がしい環境に疲れる。体調不良。

【家庭での様子】ゲームをして過ごす。朝起きられない。食が細くなる。

【保護者】協力的・丁寧な対応。

【具体的な対応策】

■毎週の家庭訪問

(完全不登校の期間中)

■短時間の別室登校

(中3から週4回)

■担任や保護者が本人と進路相談

↓高校進学に向けて見通しを立てた。

■スクラップノートづくり

↓農業に関する新聞記事をまとめ、感想を書く活動を継続して行った。入試面接にその

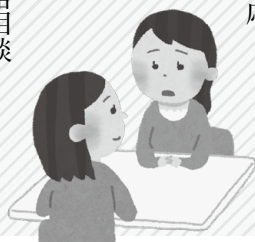
ノートを持参して、自分の言葉で説明した。

■学級に入って過ごす(卒業式前の1週間)

↓集団に馴染んで活動することができた。卒業後は農業科の高校に進学し、毎日登校す

ることができている。学習内容に興味関心

をもち、意欲的に取り組んでいる。



◆スクールカウンセラーの 立場から

インタビュー

音更町教育委員会学校教育課教育推進係

主任(スクールカウンセラー) 星 奈見さん

・不登校の現状をどう捉えていますか

―不登校には、家庭環境・学校での人間関係など「周囲の環境によるもの」、考え方や行動の癖・発達障害など「本人の特性によるもの」、「それらが複合しているもの」等があります。発達に関わる特性は、低学年段階ではあまり目立たずケアされてこなかった場合もありますが、学年が上がるとつれて学習面等で求められることが増え、対人関係でも難しさが出てくるため、ケアが必要になってきます。周囲の環境による不登校なのか、本人の特性による不登校なのかを判断することで、その後の本人・保護者とより適切な関わり方や方向性を見立てることにつながります。そのため、必要に応じて知能検査(WISCなど)を受けてもらい、本人の得意・不得意を把握した上でその後の対応に生かすこともあります。

・本人や保護者とはどのように関わっていますか
―学校では、保護者との面談を行うことが一番多いです。本人との面談だけではなく、保護者と話をする一方で、子どもの生育歴や家庭環境がわかり、より方向性を探りやすくなります。また、保

護者自身の特性や、抱えている問題・負担感などを理解することも非常に大切です。毎朝の欠席連絡をすることに苦痛を感じていたり、子どもとの関係に長年悩んでいたりする保護者など、それぞれの話を聞きながら、これからの本人との関わり方を一緒に考えていきます。保護者と学校が見立てを共有し、同じ方向性で本人に関わっていくことが大切だと思います。

・不登校への効果的な支援とは

―不登校には、明確な理由がない場合や、本人と保護者に焦りや困り感がありません。まずは本人たちがどうしたいのかを把握し、どうにかしたいと思っているタイミングで必要な支援をできることが効果的です。学校の先生方は、つい「〇学期から」「〇年生のうちに」という意識を抱きがちかもしれませんが、不登校は短期的に解決できるものではありません。本人や保護者との関わりを通して、抱えている課題を知り、学校という場に限らずその子に合った経験をさせたり、多様性を認めたり、長い目で見る必要があると思います。

・学校現場に思うことはありますか

―私は音更町のスクールカウンセラー(SC)として、小・中学校をまわっています。学校によって、別室登校や教育相談に使用できる教室の事情も様々です。学校・先生方には、不登校の本人・保護者と関わるメインの存在であってほしいと思います。SCと保護者・本人の面談に担任の先生

も入ったり、SCのいないときでもどんどん話をしたりしてほしいです。

また、私自身は面談だけではなく、時間の許す限り校舎や授業の様子を見たり、先生方と立ち話をしたりしたいと思っています。不登校の子ども、保護者のこと、気になる子どもの様子など、自分が各校に常駐していないからこそ、先生方とのコミュニケーションが大きな助けとなります。そのような情報を基に、面談の入っていない時間に教室をのぞいて気になる子どもの様子を見たり、全体の雰囲気を感じたりしています。先生方は日々忙しいと思いますが、短い時間の立ち話でもいいので、普段の情報を共有できればと思います。その小さな積み重ねによって、学校・家庭・SCが見立てや方向性を共有し、本人との関わりを生かしていくことにつながると 생각합니다。



◆フリースクールの立場から

インタビュー

自由学舎クラムボン 清野 敏彦さん

・クラムボンについて教えてください

―学校に行きにくさを感じている子どもたちに、自宅以外で過ごす居場所を提供したいという想いから2000年に設立した十勝管内で最初の民間フリースクールです。不登校の子どもたちの増加に伴って、特に昨年頃からクラムボンへの問合せや見学希望が増えています。学校の先生方に相談する前に、保護者が自分で子どもの居場所やフリースクールを調べて行動するケースが多いようです。クラムボンでは、見学と2回の体験利用を経てから、本人と保護者が相談の上、あくまでも本人の意思で来てもらうようにしています。現在は小・

中・高合わせて10名ほどが利用しています。本人のペースで、やることや利用時間を決めます。また、毎月3〜4回ほどイベントを企画しており、遠足、カラオケ大会、おやつ作り、釣り、ボウリング大会などを行います。子どもたちが楽しさ



静かな環境にあり、明るく広々とした空間。

を感じながら、他者と関わる機会をつくるのが目的です。

・最近の子どもたちの様子から感じていることは

―かつては学校に行かないことで社会と遮断される感覚がありましたが、今はSNSの存在によってつながることができているので、それはあまり感じなくなりました。

また、以前は子どもたちが企画をしたり意見を出したりすることが多かったのですが、最近はそれが減り、こちらから提案することが増えました。自分が先頭に立つよりも、誰かの提案を待つ・同調するなど、与えられることを待つ子どもが多くなった印象ももっています。

・フリースクールと学校の関わりは

―毎月末、子どもの在籍校に文書で活動報告をしています。出席扱いになるかどうかは学校長の判断になります。管理職や担任自らがフリースクールを見学しに来たり、電話連絡をくれたりする学校もあれば、特に交流のない学校もあります。お互いの立場を尊重しながら、不登校の子どもを核にして、どのように支援していくかを共有できたらと思います。そのためには、子どもを取り巻く大人たちがコミュニケーションをとって情報を共有することや、学校以外の子ども居場所について、先生方に知ってもらうことが必要ではないでしょうか。今はフリースクールが増えてきており、地域に様々な子ども居場所ができるのは健全なことだと感じています。子どもによって、合う・

合わないがあるので、居場所の選択肢があることは本人にも保護者にもよいことだと思います。

・学校現場に思うことはありますか

―保護者の中には、毎朝学校に欠席連絡を入れることや、学校から頻繁に連絡が来ることを負担に感じている人もいます。しかし、それらを直接学校に伝えることはなかなか難しいのが現状です。

私たちが連絡をするにも、ある種の敷居の高さを感じています。私たちフリースクールは、お子さんを預かっているだけでなく、保護者の皆さんからも多くの相談を受けています。私たちは学校と家庭のつなぎ役としての機能を果たすことも可能です。そのためにも、学校とのつながりを持ちたいと願っています。

また、私自身、余裕がないと子どもどううまく向き合うことができません。学校でも忙しさのあまり、子どもとの関わり方が過度に厳格になったり、十分に関わることができなくなったりする場合があります。不登校はそう簡単に解決することができないからこそ、登校をゴールとするのではなく、寄り添うことを大切に、様々な居場所や大人たちで子どもを支援していくことができればいいと思います。



利用者の声◆「学校にいるときは、スケジュールも人間関係も忙しく感じるが、ここは時間の流れが穏やかで、自分のペースで過ごせるのでストレスがない。(中学生女子)」◆「将来のことを考えると不安や焦りを感じることもあるが、クラムボンは居心地がよい。(中学生男子)」

◆おわりに

不登校のケースは一人一人異なるため、対応に明確な正解はないと言えます。その中で私たち教職員には、「登校のみをゴールとしない」という共通意識をもって、子ども・保護者の現状や望みを、対話を通して引き出していくことが求められています。不登校に向き合う時間や心のゆとりを生み出すためには、1人で抱え込まず学年団や学校全体、外部機関との連携が必要です。職員室では、互いに話をしたり聞いたりして、情報共有や助け合いができる雰囲気づくり・人間関係づくりをしていくことが、より重要になってきます。

学校に行くことができずに苦しんだり、自己否定をしたりする子どもにとって、学校とは別の居場所や、別の人間関係を見いだすことは大きな意味をもつと考えられます。しかし現状は、不登校の子どもたちの数に対し、学校に代わる居場所が足りず、相談や学習支援等のつながりが十分でないことが課題です。全国的には、フリースクールや教育支援センター等のほか、学びの多様な学校※の設置拡大も求められています。ここ十勝では、左の表にあるように、子どもの居場所が増えてきています。視点を変えて子どもを長い目で見守りながら、学校という枠にとられない多様な選択肢を持つことも大切ではないでしょうか。

(※) 学びの多様な学校：学習指導要領の内容などにとられず、不登校の子どもの実態に配慮した特別な教育課程を編成して実施している学校。令和5年8月31日に「不登校特例校」から改称。北海道では札幌市に1校設置。)

不登校には、学業の遅れ、進路選択の際の不利、仲間と過ごす体験の喪失といったリスクが考えられます。しかし、今、学校に合わないからといって、今後、別の学校や社会生活に合わないというわけではありません。大人は、子どもを否定したり不安を与えたりするのではなく、多様な選択肢を示しながら対話をして、子どもが自己選択と自己決定を積み重ねていく手助けをすることが

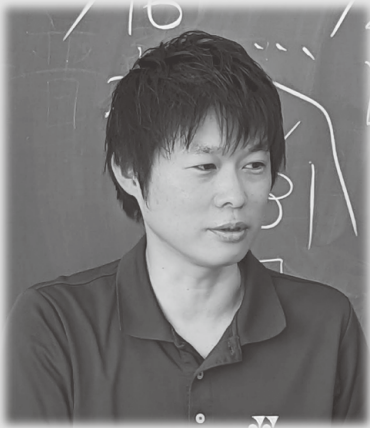
教育支援センター 市町村教育委員会が設置	場所
ふれあい教室	音更町字東音更西2線25 旧南中士幌小学校
ふれあい柳町教室「ほっと」	音更町柳町仲区12-12 旧柳町教員住宅
ひなたぼっこ	鹿追町東4丁目4
ゆうゆう	芽室町東3条3丁目 芽室町中央公民館
まっく・ざ・まっく	幕別町字千住179-4
いきいきクラブ	足寄町旭町1丁目38 足寄町生涯学習館
ひろびろ	帯広市西6条南6丁目4-1
フリースクール	場所
自由学舎クラムボン	帯広市東3条南27丁目4
悠々	帯広市西21条南3丁目15-26
星槎適応指導教室えみな	帯広市西5条南10丁目37
十勝eスポーツ教育センター	帯広市西3条南6丁目20-1
みんなの居場所ひので	帯広市東8条南5丁目15
ToRiSu	帯広市西16条南5丁目
えすばわーる帯広	帯広市西16条南35丁目2-10 ※11月移転、12月再開予定
子どもの居場所・親の会等	内容・場所
地域子育てネットすくさば	<input type="checkbox"/> 対面学習支援（市民活動プラザ六中）
	<input type="checkbox"/> オンライン学習支援
	<input type="checkbox"/> 十勝子どもの居場所・学びネットワーク協議会 輪～む ※十勝管内の様々な居場所や活動を毎月紹介
さざれいし	<input type="checkbox"/> オンライン家庭教師 ※高校卒業資格取得
こころのサロンSmiley	<input type="checkbox"/> 個別相談・カウンセリング・コーチング
おしゃべりサロンSmiley	<input type="checkbox"/> 子どもの会 <input type="checkbox"/> 親の会（音更町共栄コミセン）
3rd PLACE「MAKURA」	<input type="checkbox"/> 子どもの居場所（幕別町本町62-2）
ぶれいおん・とかち アトリエspace	<input type="checkbox"/> 子どもの居場所 （帯広市西20条南5丁目18-2）
寺子屋のつどい	<input type="checkbox"/> 不登校・ひきこもり支援相談窓口、居場所 （帯広市緑丘8丁目1-1 龍雲寺）
とかち にじいろ	<input type="checkbox"/> 子どもの会・親の会（市内各所で開催）
親の会 そよそよ	<input type="checkbox"/> 親の会（札内コミュニティプラザ）
はるにれの会	<input type="checkbox"/> 親の会（とかちプラザ）
時熟	<input type="checkbox"/> 親の会（市内各所）
風の子めむろ	<input type="checkbox"/> 子どもの居場所（芽室町保健福祉センター）
ホッとするルーム	<input type="checkbox"/> 親の居場所（芽室町中央公民館）
中札内スペシャルニーズプロジェクト	<input type="checkbox"/> 相談・憩いの場（中札内文化創造センター）

【十勝管内の様々な子どもの居場所・親の会等】

月刊輪～む・中札内村役場福祉課パンフレット・各団体HP・北海道教育委員会HP・十勝総合振興局HP・十勝毎日新聞記事等を基に作成（2023年8月現在）

大切ではないでしょうか。不登校の期間が、長い目で見て本人にとってプラスになるように、子どもに合った働きかけを探り、認めたり励ましたりしながら伴走する関係性を築くことができたらいと思います。

唯一の正解がない中で、目の前の子どもにとってはどうすることがよいのか。その保護者とはどのようにコミュニケーションを取ってあげばよいのか。考え続けながら、周りと連携してできる限りの行動を起こすことが、不登校と向き合うことなのではないでしょうか。



音更町立音更小学校

教諭 森 圭 介

わたしの 授業実践

～「子どもの言葉」を
大切にせる授業～

■はじめに

年々、一年が短く感じられるようになり、気が付けば教壇に立って20年近くになりました。

昨年度は、十勝・帯広の多くの先生方にサポートしていただきながら、第64回北海道音楽教育研究大会十勝・帯広大会の授業者を務め、全道の先生方からたくさんのご意見を頂きました。やはり、授業は多くの先生方に「鳥の目」「虫の目」「魚の目」で見えていただき、日々改善していくことが大事だと感じています。

縁あって、前任校から3年続けて6年生を担当させていただいています。学年は同じでも子どもは違います。課題は何か、子どもの心をつかめる授業は何かを探りながら、子どもの実態を踏まえた授業を心掛けています。拙い実践ですが紹介させていただきます。

■まずは「話を聴く」ことを

どの学級の担任をしても、まず、授

業を通して「心を入れて人の話を聴くこと」を指導します。それは、「教師と子ども、子ども同士で互いの言葉に関心をもたなければ心に響かないだろう。関係性が構築されていなければ、たとえ優れた教材の開発をしても、子どもたちの学びに効果的に生かされないだろう」と考えているからです。

■「振り返り」で 自らの学習の調整を

様々な教科で振り返りを行い、記述をしています。そして、朝の会や次時の冒頭の時間を使い、口頭や簡単なスライドで意図的に紹介をしています。そのねらいは、子どもたちが自分を客観視することで新たな学びに気付くことができるようにするとともに、教師が子どもの言葉を価値付け、紹介して広げること、「自分の考えは周りから認められている」と子どもたちが自信をもてるようにすることです。なお、振り返り際には、感想の羅列にならないように、その都度視点を示すよう

にしています。子どもたちの中には、文章記述が苦手な子どももいます。でも、「みんなの言葉には価値があるよ。だから、振り返りの言葉でたくさん考えや思いを伝えてね」と言葉掛けを続け、意義を理解して取り組めるように働きかけています。

子どもの言葉を価値付け、紹介することで

子どもたちが自信をもてるようにする。



本時の振り返りを行い、
Googleクラスルームに書き込みます。



■言葉を引き出す手段として活用するICT

例えば、道徳の授業では、45分の中で道徳的価値に迫れるようにしていま

す。自分の考えを発表するのが苦手な子どもたちの言葉をもっと引き出したと考へ、Jamboard等の共有ツールを利用することがあります。ただし、「書きっ放し」「交流したつもり」にならないように、次時に紹介したり、印刷して利用したりするなど、+αの活用を試んでいます。

他教科でも活用することで、新たに学級の仲間よさや考へを知り、日常の学び合いに広がりが見られています。また、「うちの子は『自分の言葉が授業で紹介された！』と喜んでいた」と保護者が教えてくれたこともありました。子どもの姿を通して保護者が安心感を得ることもあるのだなと感じました。

■目的をもった修学旅行のまとめ

これまで原稿用紙に作文を書いたり、スライドを作ったりすることで、修学旅行の学習の成果をまとめてきました。一方で、「なぜ作文を書くのか」という目的が曖昧だったり、スライドを作る

こと自体が目的になってしまったりすることに課題を感じていました。コロナ禍以前は、壁新聞でまとめることを通して、「書く力」を付けていたこともありましたが、限られた時間で取り組み難しさも感じていました。

そこで、「誰に伝えるか」という目的をもち、レイアウトを決め、限られた文字数で自分の考へをまとめることで、思考力・判断力・表現力等の育成を目指しました。今回は、A5サイズのがき新聞に表現しました。子どもたちにとっては初めての経験でしたが、短作文のトレーニングになったり、イラストや文章表記に創意工夫や個性が表れたりしていました。また、お互いの作品を鑑賞することで、手書きのよさや温かさも感じていました。今後、他教科でも実践して「書く力」や「考へる力」の向上を試みたいのです。

■おわりに

このように、最近の授業実践を振り返ると、私は「子どもの言葉」を大切

にしたいと考へていることに気がきました。

思い返してみると、大きな口を開けて歌を歌うこと、友達と手を取り合っで運動をすること、肩を寄せ合っで話したり調理したりすることなどができず、授業実践に苦勞する日々がありました。目まぐるしい日々においては、よくも悪くも「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ものです。でも、苦しかったあの頃を忘れず、「今、当たり前のことを当たり前にできることは有り難いことだ」ということを、折に触れて子どもたちに伝えていきます。

学級の中に不登校傾向の子どもたちがいることは珍しくありません。授業で頑張りたくても頑張れない子どもたちもいます。最近はその子どもたちから学び合うことの考へを重ね、子どもたちを力強く育てていきたいと考へています。

目的意識や相手意識をもって取り組み、

「書く力」「考へる力」の向上を目指す。



芽室町立芽室中学校

教諭 島田裕行

わたしの学級経営

～日常を大切にすることが できる学級を目指して～

■はじめに

私は、学校が子どもたちにとって安心して、楽しく過ごせる場所であってほしいという願いをもっています。そのため、学級経営を行う上で意識して取り組んでいることをいくつか紹介させていただきます。

■日常が全てという意識で

私は、何げない日常を大切にしたいと考えています。これは、日常の積み重ねが自分というものを形づくっていくと考えているからです。授業に一生懸命に取り組むこと、明るく元気に挨拶をすること、約束や時間を守ること、責任をもって当番活動に取り組むこと、友達とたくさん笑うこと、親切にしたら「ありがとう」と言い、失敗したら「ごめんなさい」と素直に言うこと。こうしたことを自然とできるようにと、子どもたちに伝えていきます。ここからは、日常を過ごしていく中で、工夫していることや大切にしていることを3つ紹介します。

(1) 学校行事を通して成長を確認

どの学校でも体育祭や文化祭などの学級づくりに重要な学校行事が行われ

ます。こうした学校行事は、日常の積み重ねができていくのかを確認できる大きなチャンスです。時間を守ることや自分の役割に責任をもって行動することが、できているかどうか顕著に現れます。これらを通して子どもたちを成長させたいと思うことがあります。そのため、学校行事のときだけあれこれ言っても余り効果がないと感じます。子どもたちの成長を実感できる学校行事は、日常の指導の成果や課題を振り返ることができると考えています。大きな役割をもっていると考えています。

(2) 学級通信を通して

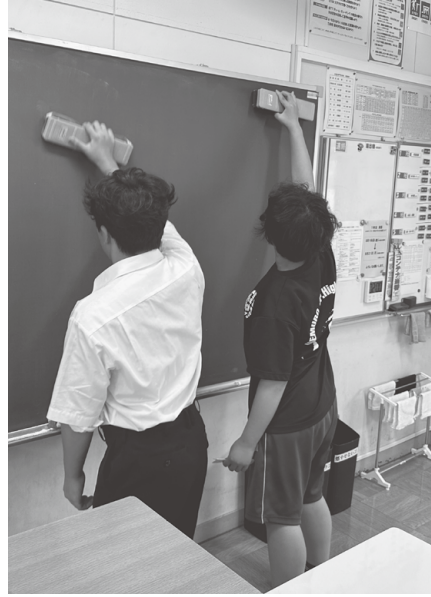
子どもたちの活動の様子や頑張りができる限りタイムリーに伝えたいと思いい、体育祭の時期には、学級通信を手書きにしています。活動している最中にも書けるので、子どもたちのこの姿を載せたいという写真や内容をより具体的に書くことができるメリットがあります。また、手書きの通信は子どもたちにとって新鮮なのか、普段よりも多く目を通してきているように感じます。しかし、その学級通信を保護者に見せずにずっとファイルにため込んでいる子どもがいることが悩みです。このことは、参観日の学級懇談の際に

(3) 褒める、叱るはぶれないように

よいものはよい、駄目なものは駄目、これは自分の中の基準を作り、子どもたちにも伝えます。命に関わることや心を傷つける行為には厳しく叱ります。ここはぶれないように心掛けてい

日常の積み重ねが自分というものを形づくっていく。





しました。その場ですぐに褒める、みんなの前で褒めるなどケースによって変えています。また、よいところをできるだけ見落とさないようにするために、小さなメモ帳を持ち歩いています。ほんのささいな出来事でもその場で記録し、学級通信などで紹介することができるので、メモ帳の持ち歩きはおすすめです。

ただ、人間ですから、よいことばかりではありません。ときには失敗だっしてしまいます。大切なことは、失敗したら「ごめんなさい」を素直に言えるかどうかだと思います。ですから、私も間違えたり、失敗したりしたらすぐに「ごめんなさい」を言いますし、よいことがあれば、「ありがとう」と伝えます。失敗しても大丈夫だと思える環境づくりを心掛けています。

■ 整然とした教室で 学んでほしい

本校では、1日の最後に清掃活動をして下校になります。子どもたちは「やりたくないな」という表情をするときもあります。気持ちは分かるのですが、掃除も頑張ってもらいます。私は、何事もやりっ放しはよくないと考

えるからです。後片付けをすることは社会に出てからも必要なことです。ですから、教室も使ったからこそきれいにして終わる、そのように伝えていきます。当然、私も教室で過ごしている一員なので一緒に掃除を行います。もし、中途半端な掃除を行っていたらやり直します。そうして毎日掃除をしていくと、子どもたちにきれいにしようという意識が芽生えてきます。今は、家の掃除は機械がやってくれる時代になりました。「面倒だな」「やりたくないな」ということをやらなくても済むようになってきていると感じます。それでも、時代は変わっても人の心は変わらないと信じています。雑然とした汚れた教室環境よりも、整然としたきれいな教室環境で学んでほしいのです。

■ おわりに

私は、退勤する前に自分の教室に行き、教室の様子を確認しています。子どもたちの表情を思い浮かべながら机を見たり、ロッカーの中を見たりします。何か意味はあるのかと問われると意味はないのですが、そこから、子どもたちの日常を探るヒントや何かを感じられることもあるため、続けていま

す。教室を見て帰ることが、日々の積み重ねを大切にしたい私にとっては日常なのです。これからも何げない日常を大切に、子どもたちとともに成長していける人間でありたいと思っています。

時代は変わっても人の心は変わらないと信じて。

ます。また、子どもたちの頑張りや成長は、心を込めて褒めるようにしていきます。褒め方も少し意識をするように



共に学び共に育つ

～継続はきっと力なり～

■言葉で思いを伝える

ささいなことが原因で起こる子ども同士のけんかは、日常茶飯事…。それぞれに話を聞いてみると、言葉で伝えていけばけんかにならずに済んだのではないかと思うことがほとんど。これまで、そのような経験が何度もありました。

衝動を抑えられず、自分の思いを言語化することが困難な子どもたちに、どのような手立てを講じていけばよいのか。悩んだ末に、「読み聞かせ」を実践してみることにしました。

■続けてきたこと

昔から、やろうと決めたことを継続できず、中途半端な状態でいつも挫折してしまう私。そんな私が、低学年の情緒学級を受けもったとき、「読み聞かせを毎日続ける」ことを心に決めました。

読み聞かせには、以下のような効果があると言われています。

- ① 豊富な語彙力が身に付く
- ② 想像力を育む
- ③ 集中力が高まる
- ④ 子どもの気持ちが安定する
- ⑤ コミュニケーションを図ることができるなど

ただし、これらの効果は継続してこそ表れるものです。

当時の私は、わらにもすがるような思いで、読み聞かせを続けてみました。

1年目は年間約200冊、もち上がりの2年目は、同僚の先生と2人で協力し、約180冊の本を読み聞

かせました。学校の図書室や町の図書館に何度も足を運び、本屋で気に入った絵本を見付けば購入することもありました。

本選びは大変でしたが、読み聞かせの楽しさに私自身もどっぷりとはまってしまいました。

子どもたちは、読み聞かせを毎日心待ちにし、国語の授業の始まりは、いつも和やかな時間を過ごすことができました。じっと座っていることが苦手な子どもも、勝手におしゃべりしてしまう子どもも、このときばかりは離席をせず、話に耳を傾けていました。



鹿追町立
鹿追小学校

教諭
只野 解子



■言葉を育てる

読み聞かせを続けた結果として、日常生活において目に見えて効果が表れたという実感は、正直なところありません。ですが、少なくともこの地道な日々の活動が、子どもたちにとって、「言葉を育てる」ことの一助になれば幸いです。

■はじめに

養護教諭になって取り組みたかったことの1つに、全校生徒との健康相談がありました。一人一人と面談することで、子どもたちの様子を知るだけでなく、支援が必要な子どもに気付いたり、日頃関わりの少ない子どもとの関係づくりに活用ができるのではないかと考えていたからです。

浦幌中学校に赴任して5年目になり、学校の様子が分かってきたことや、保健室に来室する子どもの人数が落ち着いていたこと、周りの先生方から後押しをしていただけたこともあり、今年度初めて実施することができました。

■実施方法

年度始めの職員会議で、次のように提案をしました。

① ねらい

- ・子どもの実態や健康課題を把握し、必要な支援につなげる。
- ・子ども自身が自己理解を深め、自ら課題を解決しようとする姿勢をもてるようにする。

② 期間

- ・前期（5月：1年生、6月：2年生、7月：3年生）
- ・後期（10月：1年生、11月：2年生、12月：3年生）

③ 場所 保健室

④ 実施方法

- ・1日1～2人ずつ、昼休み又は放課後に1人15分程度行う。

- ・面談日程は教室に掲示し、面談を行う当日に子どもにカードを渡す。

⑤ 相談内容

- ・生活習慣、健康に関すること など

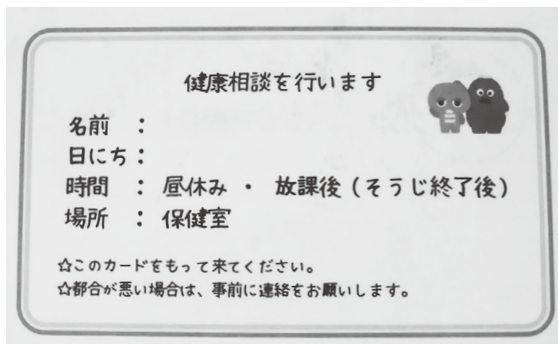
■実施してみても

前期には、1年生は中学校生活に適応できているか、不安や心配事はないかといった学校生活に関する話を聞きました。また、2・3年生は、健康面

でのアドバイスを中心に話をしました。

面談を通して、これまで個別で話す機会が少なかった子どもたちの新たな一面を知ることができました。また、一人一人と落ち着いて会話できたことは、子どもとの関係づくりにおいて、とても有意義な時間となりました。

なお、面談内容は、必要に応じて教員間で共有し、子ども理解や学級経営に生かしていきました。



浦幌町立
浦幌中学校

養護教諭
多田 怜代

■後期の健康相談に向けて

1人15分と短い時間ですが、個別に関わることに意味があると感じます。2回目となる後期は、前期からの変化の見取りや3年生の受験時期の支援を中心に行う予定です。

この健康相談を、子どもを知る手掛かりの1つにし、必要な支援に結び付けることができるよう今後も努めていきたいです。

健やかな心と体

～全校生徒との健康相談～

「自分で考え自分で決めて自分で行動する児童 (自己指導力のある生徒)」の育成に向けて ～上士幌町教育研究所の取組～



上士幌町教育研究所
所長 山田 圭介

■はじめに

上士幌町では、「上士幌町子ども教育ビジョン」を具現化するため、平成28年度より、こども園から高等学校までが1つとなった「かみしほろ学園構想」を展開しています。学園組織の1つである研究推進部の教育研究グループ内に「上士幌町教育研究所」の機能が位置付けられており、11名の部員で本町の様々な教育課題の解決に向けて主体的に取組を進めています。

■近年の取組について

(1) 学力向上に向けた調査研究

① 各種調査の分析・交流

子どもたちの学力の向上に向けては、全国学力・学習状況調査や標準学力検査、総合質問調査・i-checkの分析及び小・中学校での交流を通して、義務教育9年間を通じた授業改善の在り方やそのほかの取組について検討するとともに、町広報誌や学校便り等により保護者・地域とも共有を図っています。

② 家庭での学習習慣の定着に向けた取組

昨年度から、家庭学習の取組方法について、小・中学校で交流し、体系的な家庭学習の在り方について検討するとともに、「家庭学習の手引」「家庭学習のしおり」の改訂を進めています。

③ 学習規律の徹底に関わる取組

本町では、小・中学校で統一した学習規律があり、その徹底に向けて、毎月、児童生徒アンケートを実施し、徹底を図るとともに、アンケートの結果を踏まえ重点化した取組を進めています。

(2) かみしほろ学の推進に向けた調査研究

① 特色ある教育課程の編成

本町では、郷土愛を育むことや子どもたちのキャリア形成を図ることを目的として、総合的な学習の時間を中心に「かみしほろ学」を推進しています。推進に向けて、特色ある教育課程の編成や郷土読本の改訂に取り組んでいます。

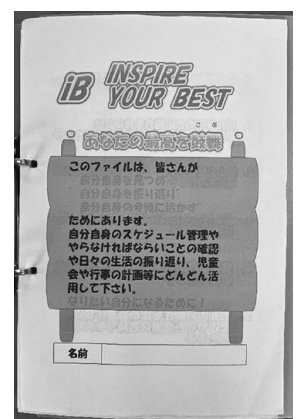
② iBノート、キャリア・パスポートの整備

本町子どもたちは、望ましい生活習慣の定着の不十分さや、自己肯定感の低さに課題が見られます。その解決に向けて、自己管理手帳「iBノート」の活用により望ましい生活習慣の定着を図っています。また、「iBノート」と一体化させた「キャリア・パスポート」を整備し、自己を見つめ、自己の存在意義や有用感を確かめられるよう努めています。

(3) 教職員の資質・能力の向上に向けた取組

① かみしほろ学園教育研究大会の開催

こども園から高等学校の教職員が一堂に会し、授業公開及び事後研究を中



自己管理手帳「iBノート」

心とした研究大会を開催しています。事後研究では、滑らかな校種間の接続を協議の柱として授業改善につながる研究会を行っています。



教育講演会の様子

② 今日の教育課題の解決に向けた教育講演会の開催

向けた教育講演会の開催

各種調査の結果や教職員アンケートを基に、本町教育の課題解決に向けた教育講演会を毎年開催しています。昨年度は、子どもたちが主体的に学ぶための授業改善について、本町と連携協

定を結んでいる、秋田県東成瀬村の前教育長の講演及び教職員による模範授業を実施しました。

③ ICTの活用に係る研修会の実施

1人1台端末の効果的な活用を推進するため、本町教育委員会に在籍するICT推進担当教諭や他町の教職員を講師に、ICTを活用した授業改善に係る研修会を毎年実施しています。また、前述のICT推進担当教諭を講師に、プログラミングに係る研修会を実施し、教職員のICT活用能力の向上を図っています。

④ 特別支援教育に関わる研修会の実施

特別支援教育の充実を目的として、専門的な講師を招いて講演会を行った、特別支援教育コーディネーターを中心に悩み相談を行ったりし、特別支援学級を担当する教職員の資質能力の向上を図っています。

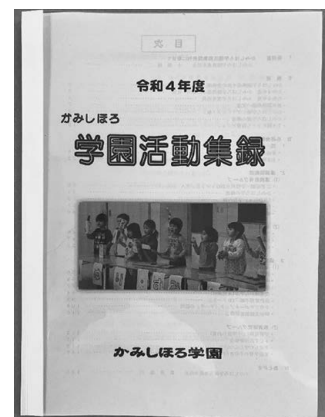
⑤ かみしほろ学園研修報告会の開催

毎年度末、教職員が研修してきた研修内容の環流を目的に研修報告会を開催しています。先進地等での研修や各種公開研究会等に参加した教職員が発表者として登壇することから、発表する教職員の資質能力の向上にもつながっています。

また、上記報告を含む年間の取組は、「かみしほろ学園活動集録」としてまとめ、町内全ての教職員に配付しています。



かみしほろ学園研修報告会の様子



かみしほろ学園活動集録

■ 今後の取組

昨年度、中央教育審議会から『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について』『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成（答申）が示され、今以上に教育研究所における調査・研究や人材育成の役割が大きくなっていると感じています。今後は、働き方改革を意識しながら、時代に合った教育研究所の在り方を模索していきます。

共同研究

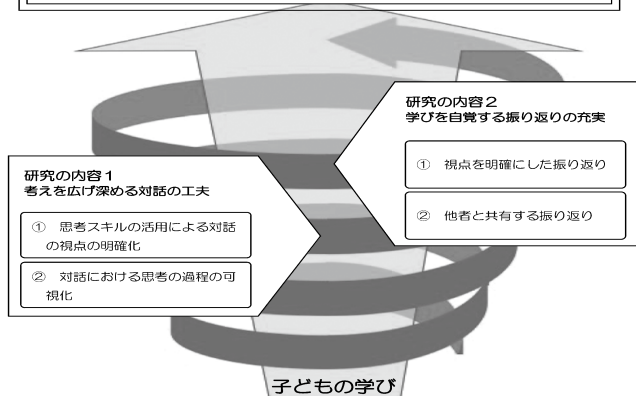
自分の考えを表現し合い、学びを深める子どもを育む研究

～考えを広げ深める対話の工夫と、学びを自覚する振り返りの充実を通して～

研究の仮説

考えを広げ深める対話の工夫と、学びを自覚する振り返りの充実を通して、自分の考えを表現し合い、学びを深める子どもを育むことができるだろう。

自分の考えを表現し合い、学びを深める子ども



考えを広げ深める対話の工夫と、 学びを自覚する振り返りの充実とは

「考えを広げ深める対話」とは、他者との協働的な学習により考えを広げたり深めたりし、自己と対話することで自分自身の考えを再形成していくもの。「学びを自覚する振り返り」とは、1単位時間の授業や単元全体を通して、自分の学びを意味付けたり価値付けたりして自覚し、他者と共有していくもの。

考えを広げ深める対話の工夫

思考スキルを対話場面で活用することで課題解決に向けたねらいを明確にし、思考の過程を可視化することで、対話の内容が整理され、一人一人が考えを深めたり広げたりすることが可能になる。

学びを自覚する振り返りの充実

振り返りの視点を示すことで、学習内容の意味や価値を深く考えたり、疑問や課題を見付けたりすることができ、他者と共有することで、新たな気づきを得ながら学びを深めることができる。

研究組織	グループ	Aグループ	Bグループ
	学年・教科		小学校第5学年・国語科
推進幹事		引地 智也 (勇足小)	安食 正人 (中札内中)
推進副幹事		齊藤 織斗 (大樹小)	長澤 翔太 (幕別中)
授業者		松井 孝之 (芽室小)	土井 誠人 (広尾中)
共同研究員		湯藤 浩二 (土幌小) 中川 弥生 (上土幌小) 市原 秀樹 (新得小) 岩田 浩平 (更別小) 菅原 千晶 (浦幌小) 尾崎 唯 (陸別小) 柴田 彩 (稲田小) 小池亜沙紀 (上瀬川小)	上野 純子 (音更中) 梅原 翔太 (鹿追中) 山内 優萌 (清水中) 遠藤 雄平 (池田中) 竹中 悠 (豊頃中) 山田 優里 (足寄中)

本研究では、各グループ2回の授業実践を通して、研究を進めています。

協力員 研究

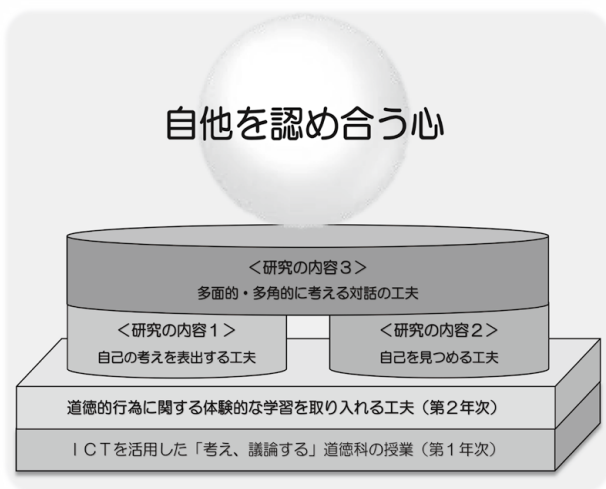


子どもたちに自他を認め合う心を育む研究

～道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れる工夫を通して～

研究の仮説

道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れる工夫を通して、自他を認め合う心が育まれるだろう。



道徳的行為に関する体験的な学習とは

道徳的価値を理解したり、自分との関わりで多面的・多角的に考えたりするために、実際に挨拶や丁寧な言葉遣いなど、具体的な道徳的行為を通して考えを深める活動。

読み物教材等を活用した時には、その教材に登場する人物等の言動を即興的に演技して考える役割演技など疑似体験的な表現活動を取り入れた学習活動も考えられる。

自己の考えを表出する工夫

登場人物への「自我関与を深める」ことをねらいとして、教材の場面を再現化する活動であり、様々な形態で再現するもの。

自己を見つめる工夫

道徳的問題の解決を図るために、教材の主人公に自己を重ねる再現化を行うことで、主題に迫るきっかけとするもの。

多面的・多角的に考える対話の工夫

ICTやホワイトボード等を活用した対話をする活動であり、積極的に自己の思いや考えを表現し、相互交流を図るもの。



研究協力員 中札内村立中札内小学校
教諭 円城寺 昌



研究協力員 大樹町立大樹中学校
教諭 大久保拓弥

管内の小・中学校各1校の協力を得て、協力員を委嘱し、授業実践を通じた研究を進めています。

授業実践1 オーストラリアの学校生活に関する質問を考えることを通して、日本との共通点や相違点について知る。(2 / 8 時)

見
通
す

- ワークシートを活用して、クラスメイトと会話文のやり取りに取り組む。
- 本時の新出単語を発音し、書く練習をする。
- 教師が発音した単語を聞き取り、ワークシートに記入する。

・30秒ごとにquestionとanswerの文を交代して読み、相手を変えて3～4サイクル行う。

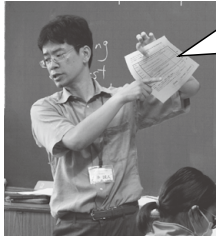


- 本時の課題を確認する。

◆課題 オーストラリアの学校生活について知ろう。

- KentaとEmmaの会話文を読み、会話文の内容を確認する。
- 質問文の考え方について確認する。

・1文ずつ音読し、単語や文の意味や発音を全体で確認する。



日本とオーストラリアの学校生活で共通するものや違うものを話し合ったり調べたりして、質問文を考えましょう。



【研究との関わり】
考えを広げ深める対話の工夫

探
究
す
る

- ペアで協力して、オーストラリアの学校生活に関する質問文を考える。

オーストラリアでも生徒が掃除するのかな。



それを英語に訳してみよう。

対話の視点「応用する」
・教科書の例文を基に、Kentaの立場になってオーストラリアの学校生活についての質問文を考える。

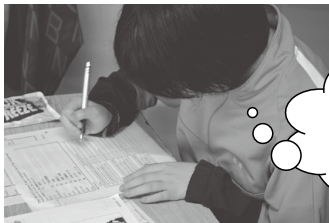
・ワークシートを活用し、お互いの考えをメモしながら可視化し、整理した上で質問文をまとめるようにする。

・単語の読み方については、タブレット端末で調べたり、教師や友達に質問したり、子ども自身が方法を選択できるようにする。

振
り
返
る

- 本時の学習を振り返る。

【研究との関わり】
学びを自覚する振り返りの充実



日本とオーストラリアの学校生活の違いを知ることができた。

振り返りの視点
① 分かったことやできるようになったこと
② 疑問に思ったこと、もっとやってみたいこと

芽室町立芽室小学校 第5学年国語科 「大造じいさんとがん」 授業者 松井 孝之

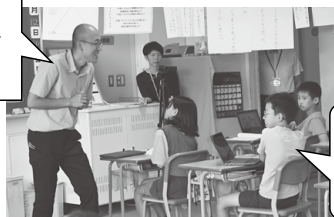
授業実践1 登場人物の特徴をまとめる活動を通して、物語全体の大まかな内容を理解する。(2/9時)

見
通
す

- 前時の学習を振り返り、本時の学習を見通す。
 - ・前時の学習で、大造じいさんの人物像を「○○な人」と表したことを振り返り、その理由を本時で伝え合うことを確認する。



自分の考えをより詳しく伝えるためにどうすればいいと思う？

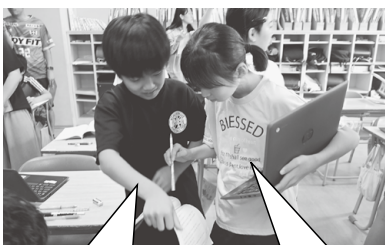


教科書に書いている言葉を使った方がよいと思う。

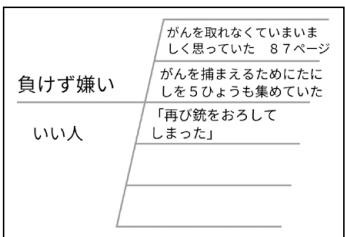
探
究
す
る

- 本時の課題を確認する。
 - ◆課題 大造じいさんの人物像について、理由をはっきりさせて考えを伝え合おう。
- 登場人物の特徴について、ロイロノートにまとめる。
 - ・くま手チャートやフィッシュボーン図など、自分の考えをまとめやすいシンキングツールを各自で選んでまとめるようにする。

- 友達の考えから、詳しくしりたいと思ったものをシンキングツールに書き加える。
- お互いの考えを伝え合う。(自由交流、全体交流)



【研究との関わり】
考えを広げ深める対話の工夫



【シンキングツールに整理した考え】

対話の視点「広げてみる」
・他者の考えを基に、自分の考えを広げる。

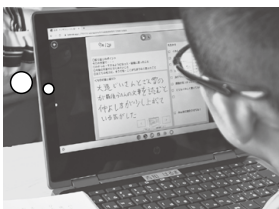
- 何度も作戦が失敗しても、がんと捕まえようとしているから、負けず嫌いな人だと思ったよ。
- なるほど。ここに「今年こそは」って書いてあるしね。
- ・ロイロノートで考えを共有し、「違うな」「そうだな」という視点で、気になった考えの友達と理由を伝え合う。

◆まとめ 物語の構成や、せりふ、行動に注目しながら読むと登場人物像が見えてくる。

振
り
返
る

- 本時の学習を振り返る。
 - 【研究との関わり】
学びを自覚する振り返りの充実
 - 振り返りの視点
 - ① 分かったことやできるようになったこと
 - ② 今後の学習で取り組みたいこと
- お互いの振り返りを共有する。
 - ・振り返りの視点を提示し、ロイロノートを使って本時の学びを振り返る。

△△さんは、○○さんの意見を聞いて、「なるほど」と考えが広がったのか。



・数名の振り返りを全体で共有し、新たな気づきを得ながら学びを深められるようにする。

研究 主題

子どもたちに自他を認め合う心を育む研究

～道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れる工夫を通して～

中札内村立中札内小学校 第6学年

授業者 円城寺 昌 教諭

研究の内容1 自己の考えを表出する工夫

研究の内容3 多面的・多角的に考える対話の工夫

主題名 「14 自由と責任」

内容項目 A-(1) 善悪の判断、自律、自由と責任

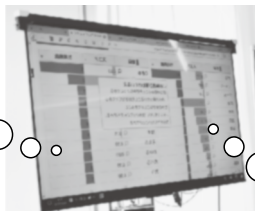
教材名 「修学旅行の夜」

導入

展開

終末

「危険」や「義務」って言葉もあるよ。



みなさんにとって「自由」とはどのようなことですか？



「好き」や「できる」って言葉が多いね。

1 「自由」とはどのようなことか？事前アンケートの結果を知る

課題：「自由」とはどういうことか考えよう。

修学旅行で楽しくなって周りに迷惑を掛けてしまったのね…。



班長の主人公も結局一緒になって騒いってしまったんだね。

2 教材文を読み、あらすじを捉える

では、実際にどんな状況だったのか？みなさんで再現してみましょう。



「道徳的行為に関する体験的な学習」

【研究との関わり】
自己の考えを表出する工夫



せっかくの修学旅行だから夜も楽しまなきゃね。



疲れて眠りたい人もいるのだから静かにして！

3 周りの状況と主人公との関係を班で再現する

【研究との関わり】
多面的・多角的に考える対話の工夫



「自由」は周りのことも考えつつ、最低限のルール範囲内で楽しむことだと思います。

4 「自由」と「自分勝手」の違いを考え、全体で交流し共有する

これまで考えていた「自由」のイメージが変わった。何をしてもよいということではないのか…。



「自由」って本当は難しいことなんだな…。

5 最初の質問に戻り、「自由」についての変容や深化を考え、振り返る

め 合 う 心

大樹町立大樹中学校 第2学年
授業者 大久保拓弥 教諭
研究の内容1 自己の考えを表出する工夫
研究の内容3 多面的・多角的に考える対話の工夫

主題名 「27 気持ちを込めて」
内容項目 B-(6) 思いやり、感謝
教材名 「心に寄りそう」

導入

1 「相手のためにと
思っただけの言動が伝
わらなかった経験」
について事前アン
ケートの結果を知
る

妹がアイスのリビン
グに置き忘れていた
ので、冷凍庫にしま
ってあげたら「勝手
なことしないで」っ
て言われた…。



本来なら喜ばれるはずが、
どうして伝わらなかったの
だろう？

課題：相手の心に寄りそうとはどのようなことだろう。

2 教材文を読み、
あらすじを捉える

あいさつをして
いたのに、患者
さんに伝わらな
かったのか…。



状況を具体的に把握するた
めに山田さんのあいさつを
再現してみましょう。



患者さんから
看護師として
大切なことを
学んだのね。

「道徳的行為に関する体験的な学習」

3 山田さんの行動
について役割を交
代しながら再現す
る

笑顔で話し掛
けてくれると、
別の話題も出
しやすいなあ。



〇〇さん、おは
ようございます。
お体の調子はい
かがですか？

【研究との関わり】
自己の考えを
表出する工夫

4 あいさつが患者
さんに伝わらな
かった原因を考え、
全体で交流し、共
有する

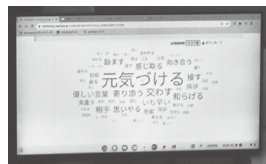
目も合わなくて、
誰に対してのあい
さつなのか分か
らないからかな？



患者さんは、き
っと自分の病気の
ことで不安なんじ
やないかな…。

【研究との関わり】
多面的・多角的に
考える対話の工夫

5 相手の心に寄り
そうとはどのよ
うなことを考え、
ねらいを焦点化す
る



相手の状況や
気持ちを感じ
取りながら、
行動すること
だと思います。



展開

6 学習を振り返り、
相手の心に寄り
そうために大切な
考えを共有する

相手に共感す
ることが大切
なんだね。



その場に
応じた対応を
するのは難し
そう…。

終末

自 他 を 認

7/28
(金)

北海道教育研究所連盟夏季所員研修会

本研修会は、全道の研究所所員を対象に、北海道教育研究所連盟が主催する研修会です。

今年度は、教育研究所・センター所員等の現状について交流を行い、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた授業づくりについて理解を深めるとともに、研修したことを域内の学校に広げるための研修等に役立てることを目的として行われました。

十勝教育研究所からは、山本所員、靄山所員の2名が参加しました。

各地の教育研究所の所員の方々との協議や授業体験、その後の演習を通して研修を深めました。



8/25
(金)

道東地区教育研究所所員研修会

本研修会は、道東地区における各教育研究所の今日的課題と役割を明確にし、併せて相互の研究成果を交流して研究所員の力量を高めることを趣旨として、毎年行われています。

今年度は、網走地方教育研修センターが主管となり、オホーツク・文化交流センターにて行われました。十勝教育研究所からは、山田所長と所員5名が参加しました。

所員部会では、各教育研究所の活動が紹介されました。その中で、白澤所員が昨年度の共同研究の概要やその成果と課題について発表を行いました。



8/31(木)
9/1(金)

北海道教育研究所連盟研究発表大会 兼全国教育研究所連盟北海道地区研究発表大会 兼十勝管内教育研究所所員研修会

今年度は十勝教育研究所が主管し、各加盟機関での教育研究、教員研修等の取組について交流・協議し、北海道教育の一層の充実・発展、並びに所員及び研究員、教職員の資質向上に資することを目的に行われました。1日目は、国立教育政策研究所の白水始氏と、廣谷貴明氏を講師に、「一人一人の子どもを主語にする学校教育の実現に向けた教育研究所・研修センターの在り方」についてお話いただきました。2日目は、2つの分科会に分かれて各教育研究所の実践発表・協議を行い、所長研修会では、各教育研究所の取組や運営についての交流を深めました。



11/9
(木)

とちぎ教育講演会

十勝教育研究所主催による「令和5年度とちぎ教育講演会」がオンライン形式で開催され、230名の参加がありました。東京大学薬学部教授の池谷裕二氏を講師にお招きし「子どもを育てる脳科学」という演題で講演をしていただきました。

「見えない学力」と呼ばれている「熱意」に関することや、子どもの自主性や自発性を育むこと、やる気の生み出し方などについて、脳の特性から学ぶことができました。また、内発的動機をもつことの重要性についても知ることができ、今後に活かすことができる実り多い講演会となりました。



令和5年度 十勝教育研究所 研究発表大会

十勝教育研究所が、今日的な教育課題について今年度調査研究した成果を発表し、研究協議を通して研究成果を広げ、今後の管内教育の充実発展に資することを目指しています。

日時

令和6年 **2月8日(木)**

14:30~16:35

※ 接続開始14:15~

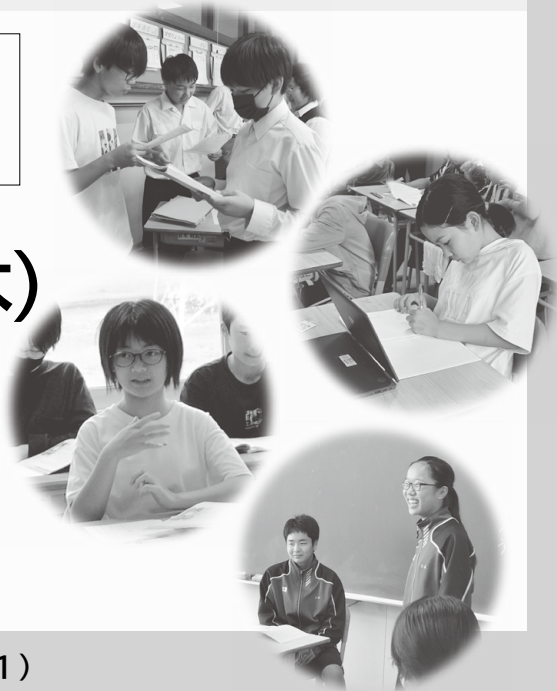
会場

Zoomによるオンライン開催

主催 十勝教育研究所（問合せ先 0155-56-2331）

共催 十勝管内教育研究所連絡協議会

後援 北海道教育庁十勝教育局 十勝管内教育委員会連絡協議会 十勝小・中校長会 帯広市校長会



えっ！
そうなの？

十勝管内小・中学校及び義務教育学校調査

数字で見る十勝の教育



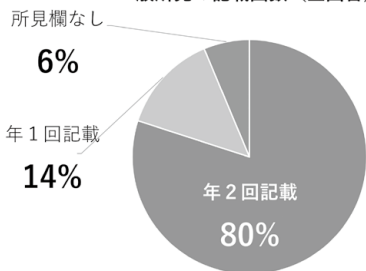
第2回アンケート結果 ※ 調査期間：令和5年9月26日～10月16日

「各学校の通知表について」

通知表の年間発行回数（全回答）



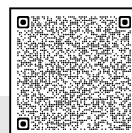
一般所見の記載回数（全回答）



【調査結果からの分析】

- ・数年前までは、十勝管内では年3回の通知表発行の小学校も多かったが、調査対象全ての校種で、年2回の通知表発行が定着してきている。
- ・授業や特別活動等について記載する一般所見は、年2回記載の学校が8割となった。その一方、保護者面談を実施するなどし、所見の記載回数を削減・廃止している学校もある。

今回は、十勝管内の95校（小62校・中31校・義2校）よりご回答頂きました。ご多用中にもかかわらず、ご協力ありがとうございました。



第2回アンケートの詳細・分析等は、右のQRコード又は十勝教育研究所HPからご覧ください。なお、閲覧の際にはパスワードが必要です。後日、教育委員会及び各学校にメールでお知らせいたします。

担当のオススメ本



JAXA宇宙飛行士選抜試験ファイナリストの体験記。あらゆる力を試される試験内容が興味深く、幅広い意味で「人間力」とは何かを考えさせられます。夢を追う挑戦者同士が、競いつつ刺激し合う姿に胸が熱くなる1冊です。

「宇宙飛行士選抜試験
ファイナリストの消えない記憶」
著／内山 崇
出版社／SBクリエイティブ

十勝教育研究

令和5年11月発行

発行所 十勝教育研究所
所長 山田 洋

〒089-0531
中川郡幕別町札内暁町290番地の2
TEL 0155-56-2331
FAX 0155-56-4260
Email staff@tokyoken.net

印刷所 北洋凸版印刷株式会社

編集後記

担当から

今年度は様々な祭りやイベントが再開し、人出が戻ってきました。そのにぎわいや生き生きとした表情を見ると、同じ場に人々が集い、何かを共有する喜びを実感します。学校現場では、マスクを外した子どもたちの素顔や表情が、随分と多く見られるようになりました。日常の有り難さをかみしめています。

今号の特集は、「不登校にどう向き合うか」でした。登校することがゴールではないこと、視点を変えて長い目で子どもを見守ること、学校だけで抱え込まないこと、そして何より、私たちが少しでも心にゆとりをもって子どもや保護者に向き合うこと。執筆を通して、様々な立場や考え方に触れる機会を頂きました。掲載した内容が、1つでも先生方のお役に立てば幸いです。

ご多用中にもかかわらず、原稿をお寄せいただきました先生方や関係者の皆様に感謝いたします。十勝教育研究所は、今後も先生方のお役に立てるよう、広報誌やHPを通して様々な教育情報を提供するとともに、授業実践に役立つ研究を進めてまいります。

次号予告

特集 「ICTの効果的な活用について」

ICTの活用が進む中で、その難しさも感じているところではないでしょうか。更なる効果的な活用に向け、学校DX戦略アドバイザーである朝倉一民教頭先生（札幌市立発寒南小学校）へのインタビューや実践事例などを特集します。

- ◇巻頭言 ◇教育現場への期待 ◇長い歴史を閉じる学校
- ◇わたしの授業実践 ◇わたしの学級経営 ◇共に学び共に育つ
- ◇健やかな心と体 ◇日本人学校より ◇研究所めぐり
- ◇教育情報 ◇数字で見る十勝の教育 ◇日々徒然 ◇学校めぐり

日々徒然

何気ない出来事に心を寄せ

転校生活も悪くない

音更町立西中音更小学校

教諭 井村

充



私の子ども時代は「転居」とともにあった。生まれは旭川市、幼少時は釧路市、小学校は岩見沢市と旭川市、中学校は函館市、高校は札幌市とおよそ3年周期で転居していた。

それに伴い、必然的に転校しなければならぬ。転校は、ものすごいエネルギーを使う。友達と別れる寂しさを乗り越えるエネルギー、新しい環境に慣れた新たな人間関係を構築するエネルギー……。転校は、私にとって疲弊でしかなかった。なので、当時の私は、転校に対して恨みに近い感情を抱いていた。小学校低学年のときは、空の段ボール箱に籠城し泣き明かしたこともあった。また、何かの折に「地元の友達が……」という話題を耳にすると、「俺にはそんなものはない」とひねくれた感情全開で、その話題からフェードアウトした。

社会人になったとき、「将来、自分に子どもができれば、絶対転校はさせない。地元の友達をつくらせてやりたい」と誓った。それから、月日は流れ三十余年。我が子は転校知らずで、地元の友達もたくさんできた。そして、私の心にも変化が訪れた。ずっと忌み嫌っていた「転校」に対する負の感情がすっと消えていったのである。

私の転校経験は、今の仕事の原動力になっていると思う。そのおかげで、今まで元気に仕事を続けてくることができたのかもしれない。「転校生活は今の自分を形成する布石だったのか」と勝手に自画自賛している現在の私がいる。

親になる

広尾町立広尾中学校

教諭 門

諒



妻の妊娠が分かったのは、昨年の10月のことだ。日に日に妻のお腹は大きくなり、生まれる日を今か今かと待ち望んでいる。

正直なところ、不安で一杯だ。心配事は尽きないもので、あれもやらなきゃ、これも考えなきゃと……。それにもかかわらず、お腹の大きい妻に対して何をどう手助けすればよいのか分からないことがある。頼りがいのない夫で申し訳ないと、自分の無力さが分かりすぎる。

そんなとき、テレビのニュースで男性の育児休業の取得について紹介されていた。自分の周りでそういった休みを取っている人はいなかったし、給料が出ないこと、職場に迷惑を掛けることなどを考え、悩んだ。それでも、妻と一緒に子育てができることを家族一同喜んでくれたので、育児休業を取得することに決めた。

最近「赤ちゃんの名前、『りょうた』っていうのはどうですか」とか、「早く奥さんのところに帰ってください」などとと言われることが増えた。子どもたちや先生方がこんなにも気遣ってくれて、「これは子育てを頑張らなきゃな」と思わずにいられない。

卒業担任をさせていただいたときに、親への手紙を書く授業をしたことがあった。「義務教育が終わるから」とか、本で読んだことの受け売りで、子どもたちに手紙を書く意義を教えたのだが、今振り返れば、もう少し違った話ができただけではないかと思う。

お腹の赤ちゃんは元気だよと、病院に行った妻から連絡が来た。今日は早く仕事を終わらせて、帰ろうと思う。

【稲作体験学習】

管内唯一の「水田のある学校」として、地域の「稲の先生」のお力を借りながら、稲作りに関わる作業を、子どもたちが行います。



学校めぐり



幕別町立途別小学校

■児童数 18名(5学級) ■教職員数10名

途別小学校は、稲作をはじめとする食農教育、とべっ子よさこい、途別百年太鼓など地域の豊かな資源を活用した特色ある教育を行っています。また、札内中学校・札内南小学校・古舞小学校とて構成される「さつない学園」の一角として、地域とともに「めざす子どもの姿」を共有し、義務教育9年間を通しての連続した見取りと一貫した指導により、小・中学校の滑らかな接続を図るとともに、児童生徒の力を最大限に伸ばす取組を行っています。



【とべっ子レストラン】

畑で採れた野菜を使って料理を作り、味わうとべっ子レストラン。メニュー決めから営農計画、調理方法の調査、調理計画まで連続した横断的な学習を展開します。



【特認校参観日】

幕別町唯一の特認校としての魅力を広くアピールする参観日。日常の学習の様子ほかに、百年太鼓も披露します。



【餅つき集会】

稲作体験学習のフィナーレは、収穫した餅米を使っての餅つき集会です。地域の方々とともに、今年の恵みに感謝します。



HP QRコード



十勝教育研究所